

# 平成30年度第7回教育委員会協議会

## 次第

1 開催日時 平成30年8月29日(水) 18:00～20:30

2 場 所 高知共済会館3階「桜」

3 内 容

17:40～ 受付

18:00～ 開 会

### 議 題

県立高等学校再編振興計画「後期実施計画」における中山間地域の高等学校の在り方について

(1) 中山間地域の高等学校の振興策について

嶺北高校、高知追手前高校吾北分校、窪川高校、檜原高校、  
四万十高校、中村高校西土佐分校、清水高校、室戸高校、佐川高校

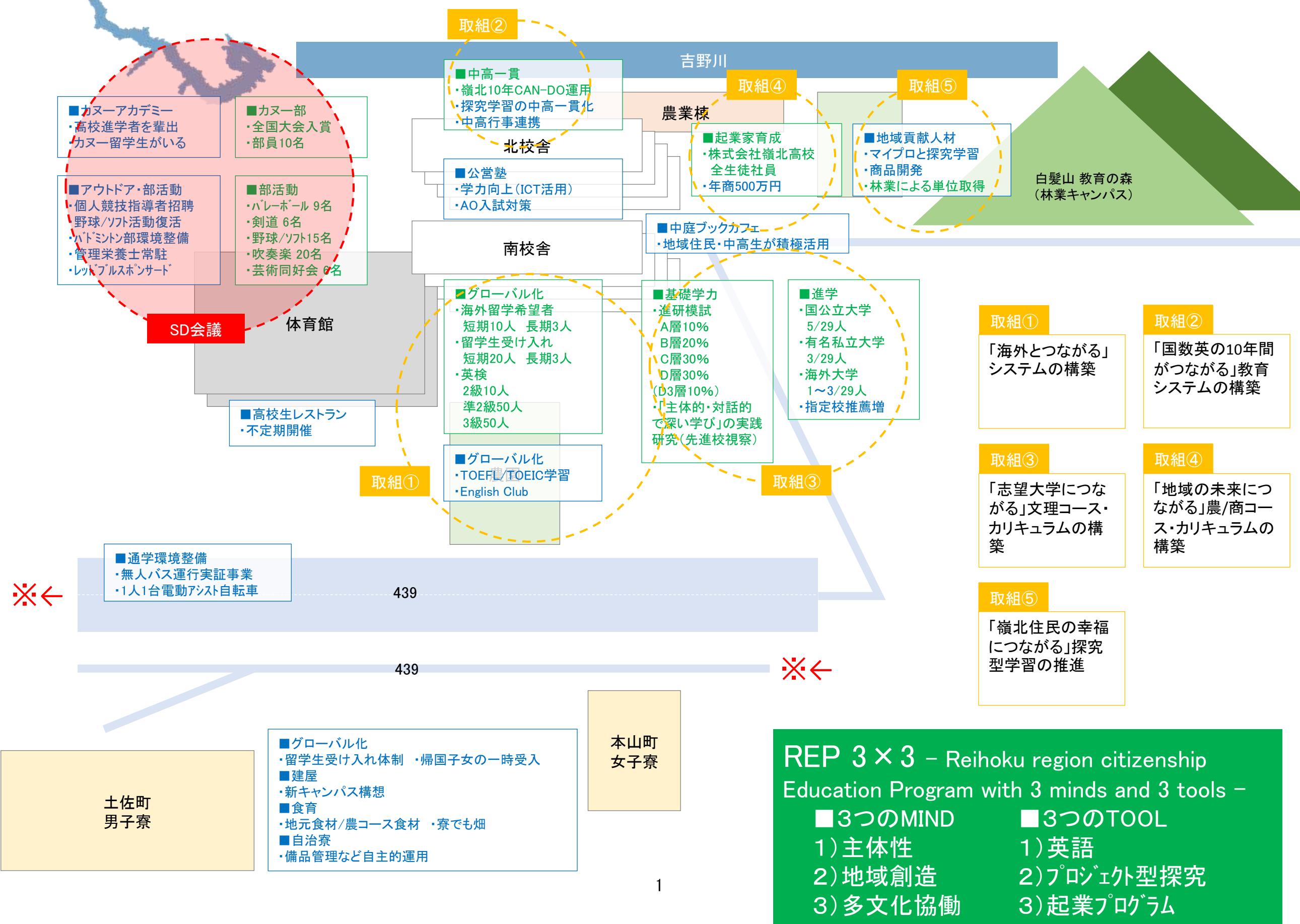
(2) 窪川高等学校と四万十高等学校の在り方について

閉 会

# 2023年度の嶺北高校を取り巻く環境

嶺北高校で取組む

嶺北地域で取組む



# ■ 2023年までのアクションプラン(嶺北高校)

	2018	2019	2020	2021	2022	2023
生徒数の推移 ※( )内は新入生の地元率	域内 67(39%) 域外 0 合計 67	75(60%) 3 78	72(65%) 6 78	84(70%) 9 93	95(75%) 12 107	100(80%) 15 115
グローバル化の推進	英語使用機会 ・放課後学習の活性化 ・地域の国際交流プログラムの活用・連携 ・海外研修支援事業の活用	・中高生対象英語合宿開催 ・日英二カ国語表示プロジェクト	・「2020嶺高海外研修」(仮称)の実施			■海外留学希望者 短期10名 長期3名 ■海外留学生の受入 短期20名 長期3名
学力の向上	■英検 2級1/準2級6/3級10 ■海外留学 短期0/長期1 ■学力到達ゾーン A層0%/B層5% C層55%/D層40% (D3層10%)	■英検 2級2/準2級14/3級60 ■海外留学 短期2/長期1 ・英国教の指導計画の見直し ・教科指導についての小中高連携の具体案の立案	■英検 2級3/準2級21/3級50 ■海外留学 短期4/長期2	■英検 2級5/準2級44/3級40 ■海外留学 短期6/長期2	■英検 2級7/準2級50/3級46 ■海外留学 短期8/長期2	■英検 2級10/準2級50/3級50 ■海外留学 短期10/長期3 ■学力到達ゾーン A層10%/B層20% C層30%/D層30% (D3層10%)
部活動の魅力化	大学進学 (H30.3卒業者) 国公立 3/25名 カース 部員5	・新しい大学入試制度の生徒/保護者への周知 部員6		四国大会出場	高知県優勝 四国大会上位入賞 全国大会出場	■大学 国公立 5/29 有名私立 3/29 海外大学 1~3/29 ・全国大会入賞 部員 10
自主活動の推進	その他 バドミントン11/ハレポール6 剣道3/卓球6/ソフトボール0 吹奏楽部15 / 商業研究3 写真同好会6 放送同好会6		■再編成 ・RYN → 「商品開発部(仮)」へ ・歴史・商業研究部 → 「総合的な探究の時間」へ ・RF/RGA → 生徒会へ ・放送・写真同好会 → 「芸術同好会(仮)」へ			ハレポール9 剣道 6 卓球 10 ソフトボール/野球 15 吹奏楽 20 芸術同好会 6 商品開発 10 ・生徒会による主体的な学 校行事の企画・運営 嶺高祭 500名 ■年間貸出数 24冊/1名
自己啓発スキルの向上	図書 年間貸出数 6冊/1名 自己管理 今未来手帳の活用 タブレットPC 配置計画	図書室の複合的活用 ・今未来手帳の毎時間活用 ・配置				・先輩・先輩から受け継ぐ主体的に学ぶ文化 ・毎授業活用

# ■ 2023年までのアクションプラン(嶺北高校)

	2018	2019	2020	2021	2022	2023
取組①	<p>■「海外」とつながるシステムの構築</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・世界基準で物事を考える国内外の同世代の若者との交流や嶺北地域の発信などを通じて、自身や地域の価値や付加価値を見出し、それぞれを高みへと引き上げる教育</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒一人1台タブレット</li> <li>・英検全員受検の推進</li> <li>・世界津波サミットへの参加</li> <li>・帰国子女や海外からの留学生の積極的受入</li> <li>・学校独自の海外研修制度の整備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「嶺高2020海外研修」の実施。</li> <li>・「嶺北高校国際交流推進基金(仮)」の設立。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校生活アンケート</li> <li>・「留学生と日常的に英語でコミュニケーションをとっている」、「英語を日常的に使う雰囲気がある」、「海外の人とコミュニケーションするのは楽しい」肯定的回答 70%</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高知県英語弁論大会、高知県英語大会等への参加 15人</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆「高校生国際フォーラム」人口、子育て・教育、地域産業、環境、自治、地域行政などの問題についての議論(日本語・英語)</li> <li>・専門家による講演</li> <li>・日本や世界の高校生が参加交流会の開催</li> <li>・中高生による運営</li> </ul>
取組②	<p>■ 嶺北地域の学校教育「国教英の10年間」がつながるシステムの構築</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・嶺北地域の小中高の国教英教員で、小中高10年間のOCAN-DOリストの研究開発を始める。小中高10年間の教科指導と評価についての目線合わせを行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「嶺北10年CAN-DO(仮称)」の研究2年目。小中高の国教英教員によるCAN-DOリスト(案)を作成する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「嶺北10年CAN-DO(仮称)」の研究3年目。</li> <li>・「嶺北CAN-DO(仮称)」の活用方法について、実際の活用を通じて研究を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「嶺北10年CAN-DOリスト」の試験的運用開始。</li> <li>・研究会で進捗を確認するとともに、descriptionの微調整を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆「嶺北10年CAN-DOリスト」小中高の国教英各教員が年4回の合同研究会を開催し、開発した「嶺北10年CAN-DOリスト(仮称)」に基づき、各校の児童生徒の学力の現状や課題を分析・報告し、指導と評価の改善を図る。</li> </ul>
取組③	<p>■「志望大学」につながる文理コース・カリキュラムの構築</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人やモノをつなげるリーダーシップ、高度な学問的知識やスキルを育む教育</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新学習指導要領の理念・趣旨を踏まえ、新科目を研究し新しいカリキュラムを完成する。</li> <li>・「遠隔教育」による他校との単位互換制度の検討</li> <li>・「主体的・対話的で深い学び」の実践研究(先進校視察)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新カリキュラム(高校1年生)のスタート。</li> <li>・「主体的・対話的で深い学び」の実践研究(先進校視察)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新カリキュラム(高校3年生)のスタート。全学年が新カリキュラムでの教育課程となる。</li> <li>・「主体的・対話的で深い学び」の実践研究(先進校視察)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆目指す学校</li> <li>『主体性、地域創造、多文化協働』の3つのマインドを身に付け、自らの判断で主体的に行動できる生徒』の育成を実現することにより、生徒・保護者・地域から信頼される学校</li> <li>◆目指す生徒</li> <li>① 知識・技能を統合的・複合的に活用・応用する力を身に付けた生徒</li> <li>② 地域が抱える課題を解決するための探究力を身に付けた生徒</li> <li>③ 高い英語運用能力を身に付けた生徒</li> <li>④ 主体性、地域創造の精神、多文化協働の精神を身に付けた生徒</li> </ul>
取組④	<p>■「嶺北地域の未来」につながる農/商コース・カリキュラムの構築</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・農商コラボ、探究型プロジェクト学習、地域の農林業の起爆剤づくり教育(起業プログラムとのコラボ)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新学習指導要領に基づく新カリキュラムの完成</li> <li>・林業科目の新設</li> <li>・「高校生レストラン」開催</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新カリキュラム(高校2年生)のスタート。</li> <li>・高校3年生が林業科目の履修。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新カリキュラム(高校2年生)のスタート。</li> <li>・高校3年生が林業科目の履修。</li> </ul>	
取組⑤	<p>■「嶺北住民の幸福」につながるプロジェクト型探究学習の推進</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「総合的な探究の時間」を用いた、産業、子育て・教育、自治等の観点から地域の未来を考え、自ら課題を設定し、解決までの道すじを提案し、実践する嶺北の市民教育</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新学習指導要領の理念・趣旨を踏まえ、「探究的な学習の時間」と「嶺北住民教育」を融合して、本校独自のカリキュラムを完成。</li> <li>※起業プログラムの融合</li> <li>図書館の多目的活用</li> <li>中庭の整備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新カリキュラム(高校1年生)のスタート。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新カリキュラム(高校1年生)のスタート。</li> </ul>	

## 今後の吾北分校の魅力化について

## 平成30年度の現状

## 【取組①】学力向上対策

- ・放課後学習支援員の活用
- ・学力向上テスト（漢字テスト）の実施
- ・英語検定に関する補足的指導
- ・学力定着把握検査の事後指導
- ・インターネットツールの活用
- ・大学受験に向けた補習等の個別指導
- ・追手前高校本校との遠隔授業システムの構築
- ・公務員希望者への個別指導
- ・地元企業職場体験学習の実施
- ・職場開拓対策

## 【取組②】部活動活性化

- ・ソフトボール部の強化 部員数13名（男子：3年5名、2年7名1年1名）
- ・バドミントン部の強化 部員数7名（男子：3年4名、2年1名：1年1名）（女子2年1名）
- ・清流太鼓部の継承 部員数4名（男子：1年1名）（女子：2年3名）
- ・軽音楽同好会の活動 部員数10名（男子：3年2名、2年1名、1年1名）（女子：3年3名、2年3名）

## 【取組③】小中高との交流活動

- ・農業体験学習を通して、池川、吾北、本川中学校と交流
- ・吾北、本川中学校の体育祭への参加
- ・本川中学校と餅つきの交流活動

## 【取組④】安心できる生活環境の構築

- ・地域外からの生徒受入

## 【取組⑤】地域に貢献できる人材育成

- ・清掃ボランティア活動
- ・合同避難訓練の実施
- ・郷土料理の講習会
- ・仁淀川エクスペリエンス（体験）
- ・農産物販売

## 課題（開かれた学校づくり推進委員会の意見も含む）

## 基礎学力の定着

- ・学力的にD層の生徒の割合が多い中、個々に応じた指導で一定の成果が出ている。
- ・授業の中で取り扱う内容が、学び直しや基礎的内容を反復するためのウエイトが高くなっており、上位層の生徒を伸ばしきれていない。
- ・個々の学習進度や進路希望に対応できる授業や教材の開発が必要である。

## 進路実現

- ・小人数のため標準的な教育課程を編成しており、現状のD層から上位層までのすべての生徒の学習意欲を高めるカリキュラムとはなっていない。

## 部活動

- ・生徒数が少ない中、多様な部活動は難しく、活動する部を絞り込まざるを得ない。（ソフトボール部、バドミントン部、清流太鼓部、軽音楽同好会）
- ・少ない人数で県内大会上位を狙うには、入部時の経験差をできるだけなくすることが必要である。
- ・部活動において、小中高との連携した取組みを抜本的に構築しないと、地域の生徒が吾北分校へ入学してこない。（ソフトボール、バドミントン、清流太鼓など）
- ・地域、学校で日常的に継続して指導できる専門の人材の数が少ない。

## 小中高との交流

- ・年間を通して交流の機会は設定されているが、イベント的となってしまう、小中学生と高校生との主体性の高い交流とはなっていない。
- ・交流の場に参加するにあたり、現在は部活動や生徒会所属生徒が主として参加しているが、それらの活動と掛け持ちとなり一人何役もの対応が強いられ、活動に限界が出てきている。
- ・日常的な小中高の教員間の交流が少ない。

## 地域外からの生徒受入

- ・地域外からの生徒は寄宿舎がないと、入学が厳しい状況となっている。
- ・本川中学校の山村留学生の中には、少人数ながら地元の高校に入学したいという希望があるので、寄宿舎があると進学しやすい。
- ・仁淀川町から吾北分校への通学に使える交通の便数が少ない。
- ・本川地区と吾北地区の交通の便数が少ない。

## 地域貢献

- ・ボランティア活動や地域活動が年間計画に基づくイベント的取組みに留まっており、生徒たちの3年間を通しての継続的な学習活動としては十分とは言えず、地域貢献や自己肯定感、達成感を得るまでの学習に至っていない。

## 今後の振興策

## ▷個々の生徒の進路保障

## ○個々の生徒に応じた教育課程の編成

- ・タブレットPCを1人1台配付し、個々の生徒が自由に学習できる環境を整備する。（全館Wi-Fi環境、大容量回線整備）
- ・標準教育課程を基に、個々の学習進度や進路希望に応じた教育課程を編成して進路実現を目指す。（教材コンテンツの官民合同の開発）
- ・追手前高校本校からの配信授業を活用し、大学進学（文系・理系）対応の選択科目を充実させる。
- ・教育センターをハブ（配信拠点）としての配信授業による選択科目数を充実させるとともに、放課後の補習や進学講座でも活用する。

## ▷部活動の活性化

## ①部活動の集中化

## ○県大会優勝を目指す（ソフトボール）

- ・吾北中学校との日常的な合同練習の実施により、中高全体のチーム力アップ
- ・専門的に指導できる教員を吾北中学校と吾北分校に常に配置を検討する。
- ・外部指導者の定期的な指導を可能とする。

## ○県大会優勝を目指す（バドミントン）

- ・吾北中学校と吾北分校の体育館をいの町のバドミントンの拠点とし、日常的な吾北中学校との合同練習、また、いの地区小中学生を含めた合同練習を週末に実施
- ・専門的に指導できる教員を吾北中学校と吾北分校に常に配置を検討する。
- ・外部指導者の定期的な指導を可能とする。

## ②清流太鼓の継承

- ・小中高の伝統継承体制をいの町と協力して再構築し、2020年高知県で開催される全国高等学校総合文化祭に向けて清流太鼓部を活性化する。

## ③軽音楽同好会の部への昇格

- ・専門的な指導のできる人材の配置。
- ・地域との連携で定期的な演奏会を開催する。
- ・高知県高等学校軽音楽演奏会、軽音楽祭での受賞。
- ※上記①～③の活動の生徒や機材等の輸送手段として、吾北分校も使用できる車両について、いの町とも協力して検討する。

## ▷小中高の交流強化

- ・吾北中学校と吾北分校との日常的な交流に向けて、教科教員の授業の交流。
- ・日常的な吾北分校の教育活動を吾北小学校に見せる機会をつくる。

## ▷安心できる生活環境の構築強化

- 安心できる生活環境を整えるために、県がいの町と協力しての取組
- ・下宿施設等の確保に向けて取組む。
- ・通学できる交通機関の確保に向けて取組む。

## ▷地域に貢献できる人材の育成

- ・いの町と協力して進めている県の産業振興計画や日本一長寿県構想の取組を踏まえ、地元産業の活性化に向けた取組や地元食材を活用した商品開発などを題材とした体験的課題解決学習を、教育課程に位置付ける。
- ・農業コースを活かしての農産物市場を授業の一環として定期的に開設する。

## 窪川高校魅力化（案）

## 1. 部活動

## ① 音楽部

・現在 30 名弱が所属しており、中には窪川高校での音楽活動を夢見て、本校に入学した生徒もいる。隣の四万十高校では、現在ジャズでの音楽活動が盛りあがっており、両校が協力して活動することで両校の存在意義を高め、音楽活動を夢見る中学生へアピールできる。また、著名人の指導による音楽的な表現力向上もめざしたい。

## ② サッカー部

・現在部員は 3 名（マネージャー 1 名）と人数は少ないが、四万十町出身で地域の少年サッカー関係者ともつながりのある専門の指導者がいることで、少年サッカーを中心に窪川高校サッカー部への関心が高まっている。今後は、近隣の中学校も巻き込み、サッカー部員増をめざす。

## ③ 地域課題探究部

・地域の課題に向き合い、解決策を考え、行動する経験をとおして、地域貢献への意欲や、内発的な学習意欲の高い生徒を育成できる。また、地域の中学生とも一緒に行動することで、継続性のある活動を展開できる。

## 2. ICT の活用

## ① 進路指導

・大学入試に集団討論や面接が増加している現状がある。同じ志望を持つ他校の生徒と ICT を活用した集団討論や面接指導を経験することで、生徒の内的動機や社会的関心が高まる。また、進路指導に関する教員のスキルアップにつなげることができる。

・進路指導の経験豊富な他校の教員が本校の進路検討会に ICT を利用して参加することで、データの見方や指導への考え方などに関する本校教員の指導力向上につなげる。

## ② 学力向上

・主体的な学習者を育成するための、ICT を活用した授業改革に取り組み、新大学入試に向けた学力向上対策をおこなう。

・スタディサプリをより使用しやすい学習環境にすることで、個別学習に対応し、学力向上につなげる

### 3. その他

#### ① 四万十町との連携

- ・公設塾「じゆうく」と連携し、学力向上および総合的な学習の時間などで探求学習を行い生徒の学びへの意欲を高める
- ・魅力化コーディネーターによる、広報や生徒募集をさらに強化し、高校の発信力を高める。

#### ② 四万十町が策定する「四万十教育プラン（仮称）」の後期中等教育を具現化するカリキュラム開発を行い、地域貢献への意欲関心が高い生徒を育てる。

#### ③ キャリア・ガイダンス・カウンセラー（仮）等を設置し、生徒の進路実現とキャリア形成への徹底的な支援を行う。

# 構原高等学校～魅力ある構原高校に向けた対策～

## 課題

- 地域や学校の活性化につながるキャリア教育の充実
  - ・ 構原人の育成のための学習活動の実践
  - ・ 特色ある学校としての取組
- 希望する進路の実現
  - ・ 学力向上に関する情報の共有
  - ・ 希望する進路の実現のための体制整備
- 学力の向上
  - ・ 学力向上に向けた学習の工夫、改善
  - ・ ICTの環境整備と活用
- 特別活動などにおける交流事業について
  - ・ 中高6年間を見通した3校の職員・生徒が協働できる取組
  - ・ 部活動の魅力化
- 学校活性化のための生徒確保

## 対策

- 地域や学校の活性化に資すると認められる取組
  - ・ YELLプロジェクトや地域をテーマとしたプロジェクト学習の充実
  - ・ コース制の深化として検定、資格取得へのサポート体制の強化
- 進路の実現のための体制づくり
  - ・ 個々の生徒への対応・理工系大学の進学に対応できるカリキュラムの構築
  - ・ 進路に応じた学びの場づくりの実現
- 学力の向上を図る取組
  - ・ 個別の学習計画に基づく学習支援
  - ・ ICTの環境の活用
  - ・ 学習意欲の喚起
- 特別活動などの活性化
  - ・ 交流事業の推進・運動部活動活性化プロジェクト
  - ・ 移動手段の整備
- 生徒確保のための充実した環境の整備
  - ・ 地域の活用
  - ・ 大学との連携
  - ・ 寮の整備

## 具体的な内容

- ① YELLプロジェクトや地域をテーマとしたプロジェクト学習の充実
  - ・ 地域や学校をPRする商品開発やPV作成、構原の産品を利用した商品開発、津野山の偉人の研究、津野山神楽の伝承
  - ・ コース制の深化として検定、資格取得へのサポート体制の強化
    - 文理コース＝英検取得
    - 農業コース＝刈り払い機取得作業者資格、伐採等の業務資格等
    - 家情コース＝家庭科保育技術検定、ビジネス文書実務検定等
- ② 個々の生徒への対応
  - ・ 学習計画のPDCAサイクルの構築
  - ・ 進路指導委員会と個別対応教員（守護神）との協働指導
  - ・ 進路カルテの作成と毎月1回の進路状況確認会議の開催
  - ・ 進路に応じた学びの場づくりの実現
  - ・ 習熟度学習（英・数・国）、学習支援員の有効活用
  - ・ 理工系大学の進学に対応できるカリキュラムの構築
    - 1年時の増単、理科系基礎科目導入、教Ⅲの設定など習熟度別授業
- ③ 個別の学習計画に基づく学習支援
  - ・ センター試験に対応できる補習体制の充実、塾講師招聘
  - ・ ICTの環境の活用
    - 遠隔教育（国指定事業）、アダプティブラーニングの利用
  - ・ 学習意欲の喚起
    - 難関国公立大学等の進学合宿への参加、大学訪問
- ④ 交流事業の推進
  - ・ 中高連携（部活動、文化的活動、学習）
  - ・ 構原町との連携【龍馬脱藩マラソンのボランティア等】
  - ・ 遠隔システム活用による他校との連携（窪川、四万十高校）
  - ・ 運動部活動活性化プロジェクト
    - 遠征費補助、中高合同練習、移動手段の確保、外部指導者の招聘
  - ・ 移動手段の整備
    - 遠征用小型マイクrohバスの導入
- ⑤ 地域との連携
  - ・ 雲の上の図書館の有効活用、短期・長期海外留学制度の充実、野球部甲子園出場プロジェクト、構原協働学習構想（保・幼・小・中・高・費教育）
  - ・ 大学との連携
    - 高知大学、高知県立大学、早稲田大学との交流や協働研究
    - 寮の整備
      - 孝山寮運営補助、新たな寮の建設

H30.8.29現在

平成二十九年年度卒業生 進路状況 54名

合格大学(国公立) 4名

高知工科大学 経済・マネジメント学群 2名

高知大学 医学部 看護学科

高知大学 地域協働学部 地域協働学科

合格大学(私立) 17名 ※(複数校合格を含む)

中央学院大学 商学部 商学科 2名

青山学院大学 法学部 法律学科

大正大学 心理社会学部 臨床心理学科

同志社大学 法学部 法律学科 2名

同志社女子大学 表象文化学部 日本語日本文学科

立命館大学 法学部 法律学科

関西大学 法学部 法律学科 2名

関西外国語大学 英語国際学部 英語国際学科

近畿大学 法学部 法律学科

大阪商業大学 公共学部 公共学科

大阪商業大学 経済学部 経済学科

大阪産業大学 スポーツ健康学部 スポーツ健康学科

関西学院大学 人間福祉学部 社会起業学科

神戸学院大学 現代社会学部 現代社会学科

吉備国際大学 保健医療福祉学部 理学療法学科

美作大学 生活科学部 児童学科

四国学院大学 社会学部 カルチユラルマネジメント

四国学院大学 社会福祉学部 社会福祉学科

東亜大学 人間科学部 スポーツ健康学科

合格短期大学2名 ※(複数校合格を含む)

関西外国語大学短期大学部 英米語学科

高知学園短期大学 看護学科

新渡戸文化短期大学 臨床検査学科

進学専門学校等(県外)

奈良ぎもの芸術専門学校 和裁特別専門学科

トヨタ神戸自動車大学校 自動車整備科

岡山医療福祉専門学校 介護福祉学科

関西総合リハビリテーション専門学校 言語聴覚学科

進学専門学校等(高知県)

高知職業能力開発短期大学校 生産技術科

高知福祉専門学校 こども福祉学科

四国医療工学専門学校 臨床工学科

龍馬看護ふくし専門学校 こども未来学科

龍馬看護ふくし専門学校 看護学科

高知理容美容専門学校 美容科

土佐リハビリテーションカレッジ 理学療法学科

高知高等技術学校 オートボディ科

高知高等技術学校 自動車整備科

就職(県内)

四国部品株式会社

株式会社南国ミロク 梶原工場

日本製紙パピリア株式会社高知工場

松井建材有限公司

須工ときわ株式会社

日鉄住金環境プラントソリューションズ(株) 2名

ミタニ建設工業株式会社

日本郵便株式会社 四国支社

就職(県外)

株式会社 食道園

株式会社 ホウスイ

医療法人 錦秀会

ダイオロジスティクス株式会社

日本食研ホールディングス株式会社

公務員

自衛隊・自衛官候補生

自衛隊・一般曹候補生

高幡消防組合 津野山分署

他1名 予備校

## 四万十高校の魅力化と生徒数確保に向けて

高知県立四万十高等学校長 山本 泰史

## 1 生徒数について

## (1) 平成20年度以降の生徒数の概要

(平成31年度以降は高等学校課による推計)

- ① 全校生徒数は、平成20年度の137人をピークに毎年減少し、平成23年度113人から平成26年度64人と急減し、平成30年度(本年度)は50名となっている。
- ② 連携中学校卒業生の本校入学者の割合は、平成23年度までは約49%~65%の間で推移していたが、平成24年以降(学区制廃止後)は約30%~49%の間で推移している。
- ③ 連携中学校の今後の卒業予定者数は、平成30年度49人、平成31年度34人、平成32年度33人、平成33年度以降は20人台で推移するとされている。
- ④ 本校への今後の入学予定者数は、平成31年度22人、平成32年度16人、平成33年度14人、平成34年度以降は10人前後で推移するという厳しい状況が示されている。
- ⑤ 地域外からの入寮者数(定員20名)は、平成25年度まで18人~13人(県外生徒ほぼ半数)で推移し、その後一桁となり本年度は6人(県外2人)の利用となっている。

## (2) 生徒数確保の数値目標

生徒達が切磋琢磨し成長できる教育環境維持に向けて、連携中学校からの本校への入学生80%以上、連携中学校以外からの入学生6~7人(寮定員20人)を目標に、次にあげる振興策を柱として生徒募集力を高め、平成33年度までは入学生25人以上、平成34年度以降も入学生20人以上(全校生徒65人以上)の安定確保に向けたサイクルの確立に取り組む。

## 2 振興策について

自然環境教育や一人ひとりの生徒に寄り添った教育を本校の強みとして継続した取組を行い、学力向上・進路実現、人格形成に努め、加えて次にあげる教育活動についての充実・発展を図る。

## (1) 魅力ある教育活動の充実・発展に向けて

- ① 地域の産業振興に関わる人材育成を目指し、学習内容の見直しに取り組む。
  - (ア) 自然環境コースの環境保全等に関する学習活動の充実・発展
  - (イ) 商業系科目に、起業に関する科目(または学習内容)を設置
  - (ウ) 農業その他におけるドローン技術習得に向けた講習会の実施
- ② 近隣高校や大学等との地域外での研修活動を行い、生徒の主体性や探究心の向上を図る。
  - (ア) 四万十川上中流域生徒会交流サマーキャンプ
  - (イ) 関西研修(大学や物流機関等での経済その他についての学び)
  - (ウ) 屋久島研修(環境保護・環境保全についての学び)
- ③ 中学校や地域等と連携した活動を通じて、生徒の視野を広げ、社会性と「夢・志」を育む。
  - (ア) ソフトボール部や音楽部(ジャズ)に、一流の指導者を招聘しての技術指導を行い、

### 全国レベルの大会での優勝を目指す

- (イ) 四万十町の海外研修事業等を活用し、グローバルな思考力を育む機会を提供する
- (ウ) 地域課題学習の推進、地域行事やボランティア活動等を通じて、地域の社会活動に積極的に参画する態度を養う

## (2) 教育体制の充実に向けて

### ① 「四万十町児童・生徒育成プラン（仮）」の策定

四万十町及び教育関係機関等と共に、「四万十町児童・生徒育成プラン（仮）」を策定し、児童生徒の学力・進路保障、キャリア教育等での連携を図り、地元高校への進学に繋げる。

- (ア) 中高一貫教育での教科指導改善、小学校から繋がったキャリア教育の推進
- (イ) 地域や町営塾と連携した探究学習や進路指導の充実
- (ウ) 児童・生徒の生活・学習課題への関係機関と連携した支援やSSTの実施

### ② ICTの活用による進学指導の充実

- (ア) 通常では少人数のため設置困難な選択科目について、他校や教育センターと連携した遠隔教育での履修
- (イ) スタディサプリやClassi等の活用による、個々の生徒のさまざまな学習段階での躓き克服、ポートフォリオ機能の活用等による新しい大学入試制度への対応
- (ウ) Fine System等を活用した、個々の生徒の学習分析や詳細な情報収集をもとにした大学進学指導による進学実績の向上

### ③ 生活支援コーディネーター（仮）の配置

寮生や特別な支援が必要な生徒等に対して、学校及び生徒や保護者、SC・SSWや舎監、身元引受人や地域、民生委員等と連携して、生活面その他での支援体制の強化を図るためのコーディネーターの配置

## (3) PRの充実・小規模校連携に向けて

### ① 県内小規模高等学校振興会議（仮）の設置

県内の小規模高等学校が互いの取組について学び合い、各校の魅力ある取組をさらに充実させ、生徒募集力を高めるための会議の設置

### ② 魅力化・PRコーディネーター（仮）の配置

地域おこし協力隊等による外部目線での、各地域の高等学校における新たな魅力の発見・創造（提案）や魅力的なPR素材の開発、県内外中学生向けPR企画等の効果的な広報活動を担うコーディネーターの配置

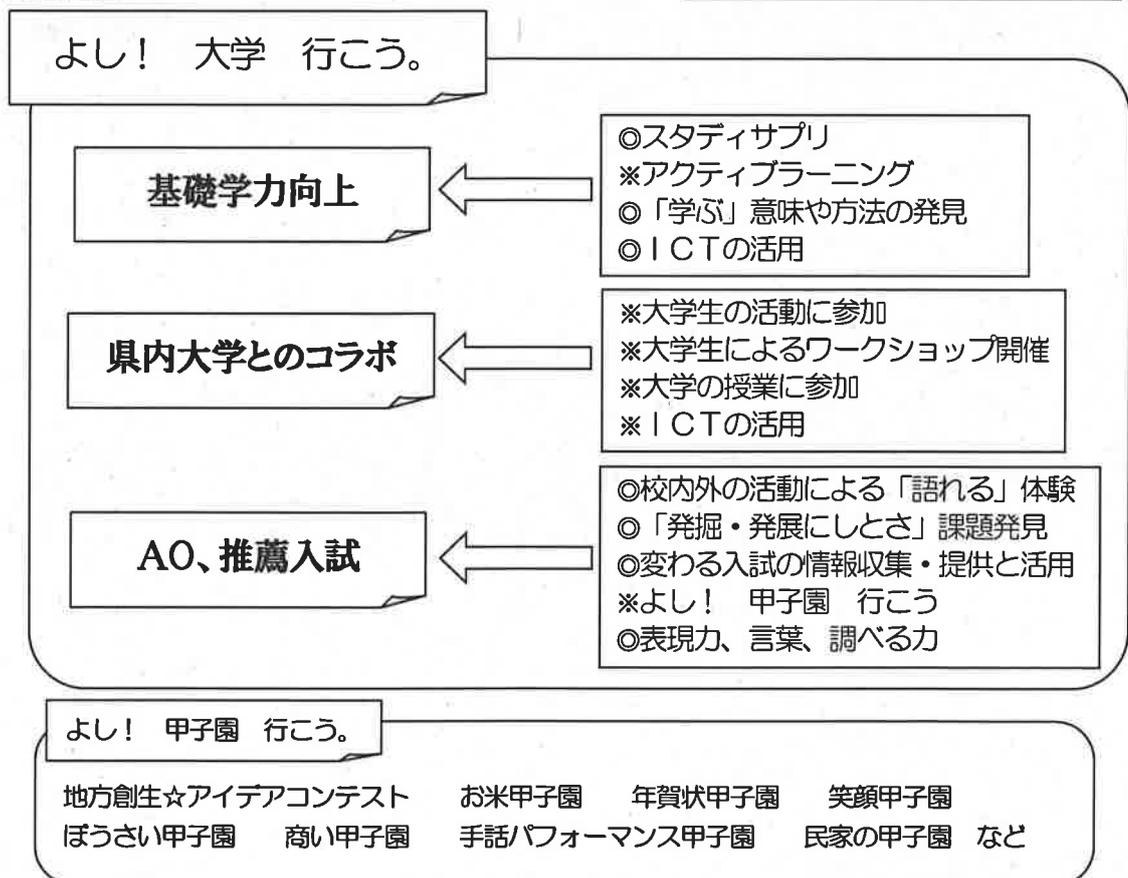
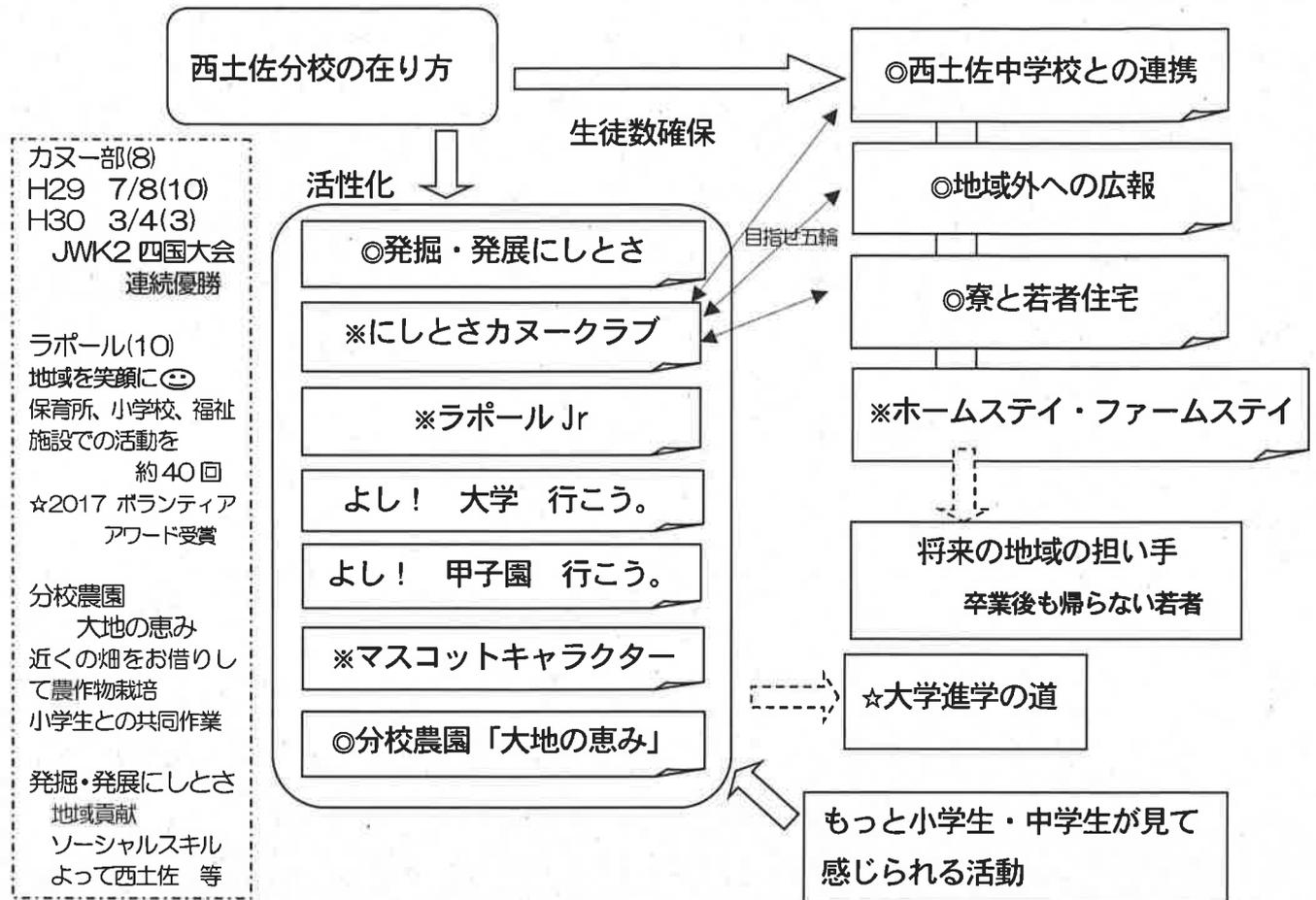
### ③ 県内外への情報発信の仕組みづくり

地域外からの一定の生徒数確保に繋げるため、県内の小規模高等学校の魅力や受け入れ体制その他の情報を、県内外の中学校等に発信する仕組みづくりを早急に必要。

## 3 その他

「地域を支えていく人材を育成するモデル事業」（2019～ 文部科学省）の活用

30. 8. 29 西土佐分校



◎ 継続・充実    ※ 計画

## 「清水高校魅力化の会」からの提言まとめ〔中山間地域にある学校に共通する方向性〕

高知県立清水高等学校

## 【 提言 1 】

・ICTの活用により多様な進路希望にも対応できる学習環境の整備や社会性の育成を図る。

◆ 生徒数確保キーワード = 進路保障

## ①タブレットを活用した難関校への進学対策講座および学び直し講座の実施

＜現状＞現在使用中のスタディサプリ視聴用 PC では動画視聴が困難。

＜要望＞スタディサプリ及び地域学習プログラム（提言 2）で活用するタブレット。

## ②難関校への進学に特化する教育課程の編成と教諭による広域担当指導体制の確立

＜現状＞生徒数減により開講できない講座がある。

＜要望＞学習指導要領改訂に伴い、少人数でも開講できる難関校対策講座の編成とその担当教諭の配置及び広域で指導できる体制の確立。

## ③学び直し講座および正規授業をサポートする学習支援員の活用の拡充

＜現状＞本年度時間講師 3 名により 142 時間の活用予定。

＜要望＞活用時間数の倍増及び担当支援員の増員。

## 【 提言 2 】

・土佐清水市と連携して地元中学校からの進学率を向上させる。

◆ 生徒数確保キーワード = 他校との差別化（魅力化）

## ①土佐清水市を担う人材育成のための小中高一貫地域学習プログラムの開発

＜現状＞小中での地域学習が高校に繋がっていない。

＜展望＞地域学習をテーマとした総合的な探究の時間で地域人材育成の核として高校が担う。

## ②中高交流の拡大と中高合同部活動の取組

＜現状＞本年度の交流授業：（高→中）3教科各8時間/週、（中→高）数学4時間/週

＜展望＞高台移転を契機に、より密接な交流と合同で行う取組が増えることが期待される。

## 【 提言 3 】

・特色ある学校づくりを行い、地域外の生徒を確保する。

◆ 生徒数確保キーワード = 他校との差別化（魅力化）

## ①部活動数の精選と地域の特色を活かした部活動の新設

＜現状＞部活動数 20（体育 11・文化 9）、入部率 89%。

＜展望＞高台移転を契機に、中高で精選を協議し、特色ある部活動を新設する。

（サーフィン・フィッシング・スキューバダイビング・ドローン 等）

＜要望＞新設部活動の指導者の配置。

## ②アメリカ・フェアヘイブン姉妹校との留学制度を活用した語学力・チャレンジ精神の強化

＜現状＞ジュン万祭り参加（7日間）と姉妹校ホームステイ（10日間）を隔年実施。

本年度 3 名分補助内訳（市 68 万円・PTA18 万円）、自己負担：14 万円/家庭。

＜要望＞ホームステイ期間増による留学費用の補助。

室戸高等学校再編振興計画 進捗状況確認票

H30. 8. 29作成

	H30年度	H31年度	H32年度	H33年度	H34年度	H35年度
生徒充足状況	生徒数(107/240名)44.6% 1年20、2年40、3年47 室戸市内(13/61名)21.3%	生徒数(104/240名)43.3% 1年44、2年20、3年40 室戸市内(34/64名)53.1%	生徒数(108/240名)45.0% 1年44、2年44、3年20 室戸市内(34/64名)53.1%	生徒数(129/240名)53.8% 1年41、2年44、3年44 室戸市内(27/47名)57.4%	生徒数(130/240名)54.2% 1年45、2年41、3年44 室戸市内(37/73名)50.7%	生徒数( /240名) % 1年、2年、3年 室戸市内( /名) %
達成目標	生徒数(130/240名)54.2% 1年43、2年40、3年47 室戸市内(33/74名)44.6%	生徒数(104/240名)43.3% 1年44、2年20、3年40 室戸市内(34/64名)53.1%	生徒数(108/240名)45.0% 1年44、2年44、3年20 室戸市内(34/64名)53.1%	生徒数(129/240名)53.8% 1年41、2年44、3年44 室戸市内(27/47名)57.4%	生徒数(130/240名)54.2% 1年45、2年41、3年44 室戸市内(37/73名)50.7%	
学校体制	総合学科 2年4系列、3年4系列 学級数7クラス	総合学科 2年3系列、3年4系列 学級数6クラス	総合学科 2年3系列、3年3系列 学級数6クラス	総合学科 2年3系列、3年3系列 学級数6クラス	総合学科 2年3系列、3年3系列 学級数6クラス	総合学科 2年3系列、3年3系列 学級数6クラス
課題	生徒数の減少 系列の検討 学力の定着 進路保障 日本ジオパーク再認定審査 全国総合学科研究寄稿	生徒数の減少 系列の検討 学力の定着 進路保障 世界ジオパーク再認定審査 四国総合学科研究発表 こうち高文祭弁論の部リハ	生徒数の減少 教育課程の検討 学力の定着 進路保障 こうち高文祭弁論の部 サッカー部創設	入学生が4年連続40名以下 の場合、普通科改編 学力の向上 進路保障 日本ジオパーク再認定審査 女子硬式野球部ベスト4	生徒数の減少 系列の検討 学力の定着 進路保障 世界ジオパーク再認定審査	
対策	広報活動の委享 市内中学説明2回 市広報活用、小学広報 部活動の活性化(勧誘等) 教育課程検討委員会 系列の統合 選択科目の維持 習熟度別クラス編成 女子硬式野球部支援 ESDの研究・発表 室戸高校魅力化の会設置	広報活動の維持 市内中学説明2回 市広報活用、小学広報 部活動の活性化(勧誘等) 教育課程検討委員会 習熟度別クラス編成 女子硬式野球部支援 ESDの研究・発表 室戸高校魅力化の会継続	広報活動の維持 市内中学説明2回 市広報活用、小学広報 部活動の活性化(勧誘等) 教育課程検討委員会 習熟度別クラス編成 女子硬式野球部支援 室戸高校魅力化の研究	広報活動の工夫 部活動の活性化(勧誘等) 女子野球、女子サッカー 野球、サッカー、バスケ 教育課程検討委員会 選択科目の再決定 習熟度別クラス編成 男女サッカー部の支援 女子硬式野球部支援 ESDの研究・発表 ICTの活用授業の研究	広報活動の工夫 部活動の活性化(勧誘等) 女子野球、女子サッカー 野球、サッカー、バスケ 教育課程検討委員会 選択科目の再決定 習熟度別クラス編成 男女サッカー部の支援 女子硬式野球部支援 ESDの研究・発表 ICTの活用授業の研究	広報活動の工夫 部活動の活性化(勧誘等) 女子野球、女子サッカー 野球、サッカー、バスケ 教育課程検討委員会 選択科目の決定 習熟度別クラス編成 男女サッカー部の支援 女子硬式野球部支援 ESDの研究・発表 ICTの活用授業の研究
備考	室戸病院閉鎖による一冢転住の拡大 部活動中高交流 クラウドファンディング開始	市のいざなぎ支援 タブレットの県からの配備	世界ユネスコ校加盟検討	世界ユネスコ校加盟検討		

平成30年8月29日  
第7回教育委員会協議会資料  
高知県立佐川高等学校

平成30年度「総合的な学習の時間」  
いのち輝け～さくら咲くプロジェクト～の取り組み

「地域定住意識を醸成する」佐高教育を推進するため、地元4町村（佐川町・越知町・仁淀川町・日高村）の役場、教育委員会に担当を配置していただき、3年間を通じ、地域と連携しながら学習を展開する。

1 学習目標

- (1) 地域社会に貢献する意欲を持つ人材の育成と地域定住意識の醸成
- (2) 社会に出て必要な能力の育成 ※経済産業省の「社会人基礎力」をもとに設定
- (3) 自ら体験したこと・学んだことを自らの言葉で語れるようにする

2 学習テーマと実施内容

(1) 1年生テーマ「地域のリソース（資源）を知る」

地元地域の様々な資源を知り、地域の人と触れ合うことで地域に誇りと愛着を持ち、将来、地域に貢献する意欲を高める。また、学習で得られた情報をグループでまとめ、発表する。

〔学習の流れ〕

- 1 学期…4町村の概要を学ぶ（各町村長または役場職員の方による説明（学校にて））
- 2 学期…4町村現地学習（事前学習：現地学習のみどころ、事後学習：まとめと発表）
- 3 学期…2年次の取り組みオリエンテーション

〔現地学習訪問場所〕

佐川町	上町周辺散策（遠足） 地場産センター、竹村邸、浜口邸（さかわ観光協会）、牧野公園 等 集落活動センターたいこ岩（尾川地区）、とかの集落活動センターあおぞら（斗賀野地区）、NPO法人とかの元気村との交流（昼食）、トマトハウスナカムラ、地域おこし協力隊による自伐型林業実践、紅茶農家「明郷園」
仁淀川町	池川木材工業、株式会社フードプラン、仁淀川町役場、あすなるカフェ、トレトレ株式会社 等
越知町	横倉山(登山)、横倉山自然の森博物館、株式会社岩や、スノーピークキャンプ場、株式会社岡林農園 等
日高村	J A トマト選果場、株式会社イチネン農園、屋形船仁淀川、エコサイクルセンター、霧山茶園、村の駅ひだか、ひだか和紙、澁谷食品 等

(2) 2年生テーマ「地域で働く（インターンシップ）」「地域の課題研究」

〔学習の流れ〕

- 1 学期…地域の課題を考える座談会（4町村より各2名参加）  
インターンシップ 事前学習：マナー講座、各事業所調べ、アポイントメント等  
事後学習：礼状、日誌まとめ（体験の感想文）
- 2・3 学期…地域の課題研究活動とまとめ  
地域でのフィールドワークや試作品の作成など

(3) 3年生テーマ「地域の未来への提言」

〔学習の流れ〕

- 1 学期…チーム会議（目的・目標の設定、活動の進捗状況確認、中間報告、夏休みの活動計画）  
※フィールドワーク等の活動は放課後・休日も実施
- 夏休み…フィールドワーク、試作
- 2 学期…活動のまとめ、プレゼンテーション講座、発表会（12月19日（水））

### 3 高大連携

高知大学地域協働学部との連携

○マイプロ講座「地域学習のススメ」（4月）講師：須藤 順 先生

○1年生地域学習での連携（調整中）

### 4 学校支援地域本部事業の活用

地域コーディネーターの配置（1名）…NPO法人土佐山アカデミー佐竹祐次郎氏

生徒の活動支援員の配置（8名）…高知大学学生、社会人

### 5 総合発表会…12月19日（水）に実施予定。

3年生：「地域の未来への提言」発表

2年生：インターンシップレポート発表

1年生：地域学習のまとめ（成果物展示）

※来賓として、地域学習に関わってくださった全事業所、教育関係機関の方に案内送付予定。

（去年は約60名参加）

〔3年生各チームのテーマ（仮）〕

No.1 ぢちちをひろめよう

No.5 佐川のPR動画をつくろう

No.2 トマトを中心に日高村の発展を目指そう

No.6 道の駅佐川

No.3 間伐材の利用

No.7・9 高齢者の運動不足改善と若者の交流

No.4 越知町パンフレットをつくろう

No.8 柳瀬川の清掃

### 3 これまで取り組みの成果と課題

#### （1）成果

地域とのつながりは年々広がり、地元の広報誌や本校が発行する地域・中学生向け広報冊子「佐高かわら版」等を通じて地域全体に本校の取り組みが認知されるようになってきており、新入生が意欲的に取り組みたい活動の一つにもなってきている。また、地域貢献意欲を高め、地域定住意識を醸成する本校の取り組みに対する各町村からの期待も大きくなっている。

このプロジェクトは仲間づくりを学習の基盤としており、1年次からグループワークを頻繁に行っていることから、他教科の学習においても少人数のグループ学習がスムーズにできるといって報告を受けている。今後推進していくアクティブラーニングの基本的な資質をこのプロジェクトを通して身に付けることができる。

#### （2）課題

○将来の進路につなげるため、体験したことを自ら語ることでできる力の育成

改善案⇒活動の記録ファイルをポートフォリオとして活用し、身についた（高めた）能力や活動の経過を振り返る活動を定期的にとり入れる。

○地元企業等への就職者数増加

H29年度卒業生49名…県内就職11名中4町村内は5名（佐川3、越知1、日高1）

○高大連携によるプロジェクトの発展

○教員のファシリテーション能力の向上

○教科横断的な学習計画づくり

## 第5回・第6回教育委員会協議会(四万十町)で出された意見

### 1. 平成 30 年度第 5 回教育委員会協議会 (平成 30 年 7 月 13 日) 窪川地域にて

#### 学校関係者より

○窪川高校は大切な町のシンボルであり、大正地域でも同じ事だとは思いますが、町の活性化のシンボルとして、ぜひ両校を存続させていただきたい。

○学校でも非常に熱心に教育に取り組んでもらっており、四万十町でも公設町営塾ができて、生徒達が非常に活性化してきた。

○地元の高校を出ていけば、地域に帰って来やすかったということもある。窪川高校を卒業して地元で活躍している人がいる。地域のリーダーとして育てていくために、地元の高校は必要である。

○同窓会でも、部活動が元気にできる環境や、魅力ある教育内容をどうしていくかと話し合ったが、子どもの多様な求めに答えていくことも、先生方には期待している。

○学校が残るということについては、発展的な形を期待している。そのままの消極的ではいけない。

○それぞれの地域で納得できる形にしてもらいたい。今後の町の移住促進施策にとっても学校の在り方が重要になってくる。

○現在、学校・地域・町が連携して取り組むことができているので、今後 2～3 年でがらっと変わってくるのではないかと。いろんな方策をとりながら両校が活性化していける学校をつくっていききたい。

○両校の存続を強く願う。両校に歴史と文化があり、それぞれが地域の核となっている部分もある。

○厳しい状況は重々承知だが、私たちも高校の魅力を PR していくとか、地域外からも来ていただくということもこれから必要と考えている。

○地元の高校に進学できることは経済的にも保護者にとって助かっていて、そのうえで進路がかなえば親として言うことはない。

○統合しても 1 + 1 が 2 とはならず、距離的要因、地域的要因を考えると 1 + 1 は 1 以下になると思う。単純に数だけで考えて欲しくない。

○確かに少人数ということは部活動などでデメリットかもしれないが、少人数であることで、先生と生徒、地域と生徒の関係が近かったり、生徒数に対する先生の数の割合が多かったり、メリットもある。

○今後影響を受ける小・中学生の保護者の意見も聞いていただきたい。

#### 四万十町より

○地域の課題を共有できていない子どもたちが、選挙で投票していくということに不安も感じている。そんななか町営塾の取組や通学助成や寄宿舎の支援などを行って教育環境の整備に努めており、地元での探究学習ができること、しっかりと勉強ができることでは良い環境にあると思う。一方で、子どもが高校をよく分かっているのかという点で、選んでもらえる学校、地域の学校の良さを伝えるべきである。

○平成 33 年ごろまでには各学校で実績をつくって、進学増につながる取組ができないと厳しいと推測する。今後学習環境の充実に取り組みたい。一方で、子どもにとっては、地域にコンビニがないとか、自動車通学することが思い出になるとか、評価する基準がまたあるだろうからそういった点も考えたい。

○今後県でも中山間地域の高校の位置づけというのは議論していただいて、私どものその方向性の中で精一杯子どもたちを応援したい。

○町営塾「じゆうく。」については、経済的に高知市内へ行かすことができないという家庭もあるなかで、地元で学習できる環境をつくっていかうという考えである。学習に加えて「志」というか地域との密接な繋がりをしっかり意識を持ってもらう。税金を投じて行っている訳なので、例えば平成 33, 34 年には地域や保護者、町民の皆さんから評価してもらえるような実績につなげていきたい。

#### 傍聴者より

○津波避難訓練の際に、乳児や高齢者の避難のなか、地元で高校生がいるということの大切さを感じた。

また、経済的問題、家庭環境など、弱い立場にいる子どもたちが、自分で高校へいける存在の必要性を考えてもらいたい。

#### 委員より

- 学校が残る場合に経済的な支援はさらに考えているのか。→町長：ある程度考えている。
- 進路指導などの面で、小中学校の先生と高校の先生がもっと話し合っていくなどの連携がもう少し必要ではないか。
- 課題を先送りして次の人に引き継がせるというのはちょっと無責任ではないかと考えている。存続の希望はよくわかるが、では存続がいつまでできるのか。先送りせず考えていくことが大事である。
- 地域の子どもから学びのチャンスを奪わない、ということであれば案2だとは思いますが、今日はあまり意見が伺えなかった。もう少し通学の問題など、課題の理解と議論が必要ではないか。
- 最大の問題は、四万十町の子が窪川高校に進学しないというところだと思う。たとえば一度やめて新しい高校をつくるぐらいの刷新をしないと、中学生の目には映らないのではないか。
- 少人数教育というメリットは理解するが、子どもはもっと大人数でやりたいと思っているのではないか。キャンパス制でバスで移動することを考えたときに、校地統合とそれほどメリットがあるのか、疑問を感じる。地域のみなさんでも考えてほしいと思う。
- 地元から高校に進んでいないことが問題で、来てもらうようになにか思い切って変えて外にアピールすることをしないといけない。まずは5割を超えることができれば良い方向にいけるのではないか。

## 2. 平成年30度第6回教育委員会協議会（平成30年7月17日）大正地域にて

#### 学校関係者より

- 尾崎知事には町営塾「じゅうく。」の視察も来ていただいて、議会では中山間に学校を残すべき、という答弁だった。
- 町でもクラブの支援、通学の支援もしている。議会でも寮費の補助が可決したところである。これから取組の成果が表れるところだと思う。
- たとえばドローン操作やカヌーの免許など、なにか資格を取ることができれば魅力化につながる。
- ジャズや自然環境コース、部活動の取組を充実させていきたい。中学校との連携を大事にして高校につなげていきたい。
- 高校の情報を小学校や中学校、そして地域に発信することは大事で、情報提供を行っていきたい。
- 少人数ならではの行き届いた指導により子どもが伸びている。いろいろな家庭があるなかで、地域の学校の大切さを伝えたい。
- 案1が望ましいが、生徒数の減少を見たときの教育の質の保障を考えると案2もあるかと思う。いづれにしても地域に学ぶ場を置いてもらいたい。
- 四万十町は、面積では淡路島より広い町であり、そこで学校を一つということにはならない。
- 全国からどう生徒を集めるか、例えばソフトボールなど、子どもが主役なのでできることを考えたい。
- 公設塾、ソフトボール、ジャズの3本柱に加えて、ドローンの活用や林業学習の在り方についても考えたい。
- 保護者の負担、経済面、通学面を考えると、地域に学ぶところがあるということが大前提であり、案1か2と思う。
- 生徒の進路実現に向けて手厚い指導をしてくれている。中学校でジャズをやった生徒が、高校でもできるということでたくさん進学した。

#### 四万十町より

- 今回たいへんな豪雨だったが、そういった場所から通わなければならない生徒がいる。たいへん広い四万十町なので、地元にある学校は大切である。

○町営塾「じゅうく。」の取組も1年4ヶ月になった。今後もしっかりアピールして、地元中学からの進学率を50%以上に高めていきたい。通塾の不便も解消できるよう取り組みたい。

○いずれの案にしても、地元高校への財政支援は町にとって重要な課題と考えている。

#### 傍聴者より

○20人を切らないように頑張ってきたが、実際の子どもの数が少ない中厳しいところもある。町も合併問題を乗り越えたので今があると思っている。県が言ってきた20人と下回ったら厳しいということだが、住民がどうしても残して欲しいとなれば残してくれるのか。

○私がPTA会長をしていたころは自然環境コースに優秀な生徒がいた。コースでは弱いので、科にすることが、大学へ行くにしても必要ではないか。

○子どもが少なくなってきて、県のほうからもこうやったらいいなど、もっと投げかけて欲しい。

○中学校でやっていることが高校でもできるということが大きいと思う。中学校との連携を大事にしてもらいたい。

#### 委員より

○四万十高校を卒業すれば町でこういった仕事ができるということがわかれば、全国にも大きなアピールになる。カヌーのインストラクターとかネイチャーガイドになれるとか。そういった意味では商工会との連携も大事になってくるのではないか。

○自然環境を学ぶうえで、指導する教員確保も大事である。自然環境は出口がはっきりしないということが不人気につながっているので、卒業後に町で働ける、ということがあれば一つのポイントになる。

○部活動を通じた中高連携はよいと思う。ソフトボールやジャズ以外でも、この中学校でこんなことやって四万十高校でこう発展できる、という道筋ができればよい。

○地域を担っていくという意味で、学校が残ることは大切だと思う。一方で、では持続的に学校が残っていくためにどうしたらよいか、と思うので、もっと議論したいと考える。

○学生時代だけそこにいるというような一時的なものではなく、地域に残ってもらってこれから四万十町が活気づいていくような取組ができればと思う。

○四万十町の広い面積を考えると、地域に残すことがより重要だと感じた。一方で中学生卒業生全員が入学したとしても人数は厳しい状況であり、限られた部活だけでなく、広く生徒を集めていかないといけないと思う。今日のお話では第2案を強く感じる場所である。

○人口が減っているという経験したことのない状況をクリアしていかなければならない。地域に情報発信して地域の方とともに考えていく必要がある。四万十町の子どものことを考えてこれから意見を述べたいと思う。

○前回の窪川での会議、そして今日の会議を踏まえ、委員さんからも各地域には学校は必要という意見が出されている中、案3はないという方向でいきたい。案1か2かということについては、もう少し議論を重ねていきたい。

## 窪川高等学校と四万十高等学校の在り方について

	案1 「窪川高等学校と四万十高等学校を存続する。」		案2 「窪川高等学校と四万十高等学校を統合し、キャンパス制として、両校の校地を利用する。」	
	①	②	③	④
学校・キャンパス	窪川高校 2学級 四万十高校 2学級 (現状と同じ。)	窪川高校 2学級 四万十高校 1学級	窪川キャンパス (仮) 2学級 四万十キャンパス (仮) 2学級	窪川キャンパス (仮) 2学級 四万十キャンパス (仮) 1学級
課程・学科	全日制・普通科	全日制・普通科	全日制・普通科	全日制・普通科
学科・コース	○窪川高等学校 (2学級) 普通科 2年次よりコース選択 ・地域リーダー養成コース (農業系・商業系) ・大学進学コース (文系・理系)	○窪川高等学校 (2学級) 同左	○窪川 (仮) キャンパス (2学級) 普通科 2年次よりコース選択 □□コース (地域課題の解決等を通じた探究的な学びを提供する加付) ■ ■コース (大学進学を目指した加付)	○窪川 (仮) キャンパス (2学級) 同左
	○四万十高等学校 (2学級) 普通科 ・普通コース (文理・情報) ・自然環境コース	○四万十高等学校 (1学級) 普通科 2年次よりコース選択 □□コース (地域課題の解決等を通じた探究的な学びを提供する加付) ■ ■コース (大学進学を目指した加付)	○四万十 (仮) キャンパス (2学級) 普通科 2年次よりコース選択 □□コース (地域課題の解決等を通じた探究的な学びを提供する加付) ■ ■コース (大学進学を目指した加付)	○四万十 (仮) キャンパス (1学級) 普通科 2年次よりコース選択 □□コース (地域課題の解決等を通じた探究的な学びを提供する加付) ■ ■コース (大学進学を目指した加付)
	<u>窪川高校 (H30年度)</u> 1年 25人 2年 27人 3年 38人 合計 90人 地域リーダー養成コース 16人 地域リーダー養成コース 29人 大学進学コース 11人 大学進学コース 9人  <u>四万十高校 (H30年度)</u> 1年 18人 2年 13人 3年 19人 合計 50人 普通科 15人 普通科 9人 普通科 13人 普通科 37人 普通科自然 普通科自然 普通科自然 普通科自然 環境コース 3人 環境コース 4人 環境コース 6人 環境コース 13人		【窪川・四万十のキャンパス制の考え方】 ○同一の教育課程・学校行事とする。 ○学校の教育目標や教育活動などを共有する。 ○時間割の一部共有化を図る。 ※授業の合同化：× (遠隔授業を除く。) 部活動の合同練習：△ (主として土日) 学校行事の合同実施：○ ↓ 社会性の育成や、生徒間の切磋琢磨は、部活動の合同練習や、学校行事の合同実施で確保	
移動手段			【キャンパス間の移動】 ・合同行事等の際の移動手段について検討が必要。バス等の借り上げ、又はバスの購入 ・移動手段に係る安全確保策の検討が必要	
管理職の配置	窪川高等学校：校長1名、教頭1名、事務長1名 四万十高等学校：校長1名、教頭1名、事務長1名		・校長1名 (キャンパス間を行き来する) ・教頭 (副校長) 2名 (各キャンパスに配置) ・事務長1名 (キャンパス間を行き来する)	
授業	【窪川・四万十の現状】 ○遠隔授業の実施 (H28～) ※両校は、遠隔授業を契機に校時を合わせている。 1時限：8:50～9:40 2時限：9:50～10:40 3時限：10:50～11:40 4時限：11:50～12:40 5時限：13:25～14:15 6時限：14:25～15:15 7時限：15:25～16:15 両校とも水曜のみ7時限、それ以外は6時限 (水曜は、原則として部活動は休み)		○両キャンパス間の距離が20キロメートル以上あり、移動に片道30分、往復1時間余りかかる。 ・授業での生徒移動は：行わない。 ・授業での教員移動は：原則として行わない。 (教員移動は、「音楽」「美術」等の科目を想定)	

部活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>部活動によっては他校との合同チームとして大会等に出場（原則、全国大会への出場はできない）。</li> </ul> <p>※窪川高校（H30年度） 音楽部 17、美術部 4、食物・手芸 3、茶華道 5、陸上競技 4、バレーボール 2、バスケットボール 7、野球 1、サッカー 1、卓球 4、リトニス 5、水泳同好会 1</p> <p>※四万十高校（H30年度） 放送 4、美術 2、自然環境 5、緑葉 4、情報処理部 2、家庭科 14、音楽同好会 6、ソフトボール（男子） 12、バレーボール（女子） 7</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>一つの学校として大会等に出場できる。（全国大会への出場はできる。）</li> <li>部活動は、必要に応じて合同練習を実施。</li> <li>合同練習できない日には、遠隔授業システムを活用して、合同ミーティングを行うことも検討</li> </ul>									
合同で実施する学校行事など	<ul style="list-style-type: none"> <li>交流行事を実施</li> <li>生徒会の連携</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>式典、クラスマッチ、体育/文化祭などはどちらかのキャンパスで実施 例えば、体育祭や文化祭を、隔年で窪川地域と大正地域で開催。</li> </ul>									
振興策・課題等	<p>【振興例】</p> <p>○窪川</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ICTの活用（遠隔授業等）</li> <li>地域リーダー養成コース</li> <li>サッカー</li> <li>音楽（軽音楽）</li> </ul> <p>○四万十</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ICTの活用（遠隔授業等）</li> <li>ソフトボール</li> <li>音楽（ジャズ）</li> </ul>	<p>【振興例】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ICTの活用（遠隔授業等） ※一つの学校であり、行事も合同で行うため、遠隔授業を実施しやすい。</li> <li>サッカー</li> <li>ソフトボール</li> <li>音楽（軽音楽・ジャズ）</li> </ul>									
	<ul style="list-style-type: none"> <li>両校で遠隔授業を実施しており、一方の学校で開講できていなかった教科・科目について、遠隔授業で授業配信することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>一方のキャンパスで開講できていなかった教科・科目について、遠隔授業で授業配信することができる。 ※職員会議等のテレビ会議化も必要</li> </ul>									
イメージ ※H30年度入学生	<table border="1" style="width:100%; text-align:center;"> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>					<table border="1" style="width:100%; text-align:center;"> <tr> <td></td> <td>一つの学校「〇〇高校」 4学級 43人(※)</td> <td></td> <td>一つの学校「〇〇高校」 3学級 43人(※)</td> <td></td> </tr> </table>		一つの学校「〇〇高校」 4学級 43人(※)		一つの学校「〇〇高校」 3学級 43人(※)	
		一つの学校「〇〇高校」 4学級 43人(※)		一つの学校「〇〇高校」 3学級 43人(※)							
	異同	異同									
	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域に学校が残る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域に学校が残る</li> </ul>									
	<ul style="list-style-type: none"> <li>校名は、「窪川高校」「四万十高校」のまま</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>校名は一本化：「〇〇高校△△キャンパス」（キャンパス名はそれぞれで名称を付けられる。）</li> </ul>									
	<ul style="list-style-type: none"> <li>「校歌」「校章」「制服」もそのまま</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「校歌」「校章」「制服」の検討が必要</li> </ul>									
	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校運営の独自性が保障される。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>複数のキャンパスを持つ一つの学校としての運営となる。 両方のキャンパスともに特色のある教育内容を提供していかないと、生徒数が現状以上に減少していく可能性がある。</li> </ul>									
<ul style="list-style-type: none"> <li>「窪川高校」「四万十高校」のそれぞれに、1校としての教員配置あり。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>複数のキャンパスを持つ一つの学校である「〇〇高校」に、1校としての教員配置となる。 そのため教員の加配が必要となる。（県単予算で国の基準よりも多く配置）</li> </ul>										
<ul style="list-style-type: none"> <li>部活動において、生徒数確保が難しく、合同チームでは全国大会に出場できない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>部活動において、1校として全国大会に出場できる。</li> </ul>										
<ul style="list-style-type: none"> <li>大正・十和地域の生徒だけでは限界があるので、「地域みらい留学フェスタ」、「高知暮らしフェア」（県移住促進・人材確保センター）に参加するなど、県外を含め圏域外の生徒の確保が必要。 ※ 窪川高校、四万十高校だけでなく、中山間地域の学校9校全体としての取組が必要。 ※ 四万十町への移住者： H28：41世帯53人（県内4位） H29：65世帯88人（県内3位）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>部活動や学校行事の交流を通して、社会性の確保を担保する。</li> <li>キャンパス間の移動時間が長時間になると、キャンパス制のメリットが弱まる。</li> </ul>										

## 県立高等学校再編振興計画「後期実施計画（H31～H35）」最終検討案への四万十町の意見の概要について（平成 30 年 8 月 20 日）

### ■最終検討案

- ①案：窪川高等学校と四万十高等学校を維持
- ②案：両校を統合しキャンパス制として両校の校地を利用

### ■最終検討案に対する町意見の概要

- 今後のまちづくりにおいても高等学校の教育現場は必要不可欠である。
- 7月の教育委員会協議会では、窪川高等学校と四万十高等学校の両校の存続を望む声が多く示された。
- 町としても、町営塾の運営、教育振興会への補助、海外研修など、総額 5,500 万円の支援策に、危機感と覚悟を持って取り組んでいるが、開始してまだ 1 年余りで、道半ばである。
- 一定規模の生徒数を確保するために、地元中学校からの入学者数を増加させるなどの取組が求められ、さらなる振興策や地域協働分野も模索中である。
- 後期実施計画期間においては、①案（窪川高等学校と四万十高等学校を維持）を希望し、両校のさらなる振興策を最大限支援（推進）する。
- 後期実施計画期間中の取組を踏まえ、定員充足状況や継続的な教育効果が得られないと判断された場合は、1校への統合もやむを得ないとする。

### ■今後の振興策案

- 入学者数増を目指した生徒募集強化（町内を中心として町外発信と受入体制強化）
- 希望進路実現、個々の多様性への対応、学力向上（学習支援、多様な関係性を支援）
- 特色・実績重視とした部活動の選定と強化（全国レベルを目標～活性化）
- 中高連携や町教育ビジョンとも連動可能な教育プログラム（キャリア・ふるさと教育等）
  - ・高校応援大作戦（町営塾、コーディネーター配置、通学・寮運営支援等）の実績づくり
  - ・地域との連携分野確立と強化（産業、地域づくり、活性化に向けた出口支援）
  - ・県立高等学校と行政や地域との課題解決に向けた意識共有（理解・協働）がカギ
- 将来を見据えた持続可能な魅力ある教育環境に向け集中と選択の時期であり、地方活性化の拠点として、覚悟と責任をもって存続させるという強い意志の共有を図る必要がある。